第37回十勝農協連海外農業研修視察

ニュージーランド・オーストラリア 農業研修視察報告書

2014年

11月26日(水)~12月6日(土)

十勝農業協同組合連合会

発刊にあたって

十勝農協連海外農業研修視察は、海外の農業事情の研修視察を通じて農業生産水準の向上を図り、十勝農業の発展に寄与することを目的に、昭和 51 年から実施しています。第 37 回となる今回は、TPP 交渉相手国であるニュージーランド・オーストラリアの農業情勢の研修を目的に、管内 7 農協の役職員 14 名に十勝毎日新聞社および事務局を含めた総勢 16 名で訪問しました。

両国とも国内市場が小さいため、国内生産量に対する輸出の割合が高いことが特徴で、ニュージーランドについては、乳製品生産量の95%が輸出に振り分けられる、世界最大の輸出国となっています。また、オーストラリアについては日豪EPA協定の締結に伴い、我が国に対する牛肉の輸出が増えることが懸念される状況にあります。しかしながら、今回訪問した両国の農業生産現場や農民組織との交流を通じて、輸出に依存する生産体制の脆弱さを垣間見ることができたことは、団員たちにとって貴重な経験であったことと思います。

また、農業大国として認知されている両国であっても、都市部への人口集中と農業後継者不足という、我々と同じ問題に直面していることも知りました。同じ農業者として問題意識を共有することができたことは、これからの十勝農業を考える上で大きな収穫であったと思います。また、広大な農場を家族が力を合わせて取り組む姿を見ると、「農業は金儲けのためではなく、自然を相手とし、収穫の喜びを味わうことのできる素晴らしい職業である。」という農業経営の基本は、世界共通であると認識できたことと思います。

世界の食料をめぐる情勢は、主要な生産国の異常気象などによって供給力に翳りがみられるなか、中国などの消費は増大傾向にあり、需給の逼迫感が増しております。 国民に安全・安心な食料を安定的に供給していくことは農業者の責務でありますが、 そのためには農業者が安心して生産に打ち込める環境を整えていく必要があると考えます。

結びに、研修視察の実施に際して格別なるご協力を賜りました関係各位に心より感謝申し上げますとともに、海外の農業事情を紹介した本報告書が十勝農業発展の一助となれば幸いに存じます。

平成 27 年 1 月

十勝農業協同組合連合会 代表理事会長 山本 勝博



山本伊藤高木中村(スタッフ)久保坂根山川高橋遠藤瓦井(スタッフ)柴田小池畔木佐藤名波三津田

メルボルン市 ヴィクトリア州農畜産業従事者連盟にて 2014年12月2日 (火)

目 次

Ι	はじめに	1
П	第37回十勝農協連海外農業研修視察団名簿	2
Ш	研修視察日程	3
IV	研修視察報告	
1.	ニュージーランド (訪問先所在地)	
	(1) Msrphona Farms (Pukekohe) 有機酪農経営法人、飲用乳製造・販売	5
	(2) Desley & Steve Mcgougan Farm (Hamilton) 大規模放牧酪農家	7
	(3) Federated Farmers Hamilton (Hamilton) ニュージーランド農民連盟ハミルトン支部	8
2.	オーストラリア (訪問先所在地)	
	(1) Grain Coop Co.,Ltd. (Geelong) 穀類貯蔵・出荷港湾会社	10
	(2) Dark Farm (Blampide) 有機栽培農家 ワイナリー経営	11
	(3) Victoria Farmers Federation (Melbourne) ヴィクトリア州農畜産業従事者連盟	13
	(4) Wall Farm (Lyin Fild) (Gowangardie) 肉牛・綿羊・小麦生産農家	15
	(5) Cook Farm (Pine Lodge South) 畑作農家 精密農業への取り組み	17
	(6) Dajory Farm (Grahamvale Road) 肉牛(マレーグレー種)の繁殖・肥育	19
	(7) Qeen Victoria Market (Melbourne) メルボルン市で 140 年間続く市場	22
V	団員所感	24
VI	視察国の農林水産業および農林水産物貿易の概要	39
(付翁	》)十勝毎日新聞掲載記事	43

Iはじめに

第37回十勝農協連海外農業研修視察は、管内7農協14名の役職員・十勝農協連(事務局)に、十勝毎日新聞社の記者を加えた16名の団員で、11月26日から12月6日までの11日間、オーストラリア・ニュージーランドの農業研修を行って参りました。

両国と日本においては TPP 交渉が行われており、交渉の結果次第では我々十勝の 農業者にとっては多大な影響を及ぼすものであることから、両国の地で農業者及び関 係者の話を聞き、現地の状況を視察できたことは大変有意義なことでありました。

11 日間の視察研修中は初夏の季節であり、オーストラリア・ニュージーランド共に天候に恵まれ過ごし易い気候でした。オーストラリアでは雨量が少ないため、乾燥した気候故に広大な農地に灌漑用水の設置が多く見られました。その広大な農地を利用して経費の支出を抑えた大規模農業が展開されており、農業輸出大国の現状が、十勝とは桁違いのビッグスケールであることを実感することができました。一方、ニュージーランドでは1年中作物を生産できる温暖な気候を背景に、酪農では放牧経営中心に、生産から販売・輸出までを一貫して事業展開していました。そして、両国の農業者に共通しているのは、自分たち農業者が世界の食糧を担っているのだという自負を持って農業を営んでいることだと感じました。

今回この研修に参加させていただき、食料自給率向上と、安全で安心な農畜産物を 消費者に届けるという役割を農協・農業者が再認識すると共に、世界を意識した農業 経営を行っていかなければならないと実感することができました。

最後になりますが、今回の海外農業研修視察に参加させていただきました、各農協・十勝農協連・(株)日本旅行等、関係各位の皆様に厚くお礼申し上げますと共に、この視察研修に参加されました皆様のご活躍と、今回の研修の成果が十勝農業発展の一助となることを祈念申し上げます。

第 37 回十勝農協連海外農業研修視察団 団長 久保 恵昭 (十勝池田町農業協同組合)

Ⅱ 視察団名簿

2014年11月26日現在

No.	氏 名	農協名	役 職 名	摘要
1	くぼ よしあき 久保 恵昭	十勝池田町農協	監 事	団長
2	たかはし かずや 高橋 和也	浦幌町農協	上浦幌支所 管理課長	副団長
3	やまもと のぼる 山本 昇	帯広大正農協	大正給油所長	
4	くろき つかさ 畔木 主	大樹町農協	理事	
5	さかね まさゆき 坂根 昌幸	大樹町農協	監事	
6	みつだ たかよし 三津田 隆義	大樹町農協	貯蓄共済課長	
7	ななみ ひでき 名波 秀毅	鹿追町農協	理事	
8	やまかわ ひろえつ 山川 弘悦	音更町農協	監事	
9	しばた まさみ 柴田 昌美	音更町農協	監事	
10	なかむら けんいち 中村 賢一	音更町農協	監事	
11	さとう のぶとし 佐藤 信敏	上士幌町農協	理事	
12	かわらい ひろし 瓦井 博	上士幌町農協	監事	
13	えんどう やすし 遠藤 泰志	十勝池田町農協	生産資材課長	
14	たかぎ まさし 高木 政志	浦幌町農協	理事	
15	いとう りょうた 伊藤 亮太	十勝毎日新聞社	政経部 記者	
16	こいけ ひさし 小池 寿	十勝農協連	企画室 調査役	事務局
	さかもと ゆき 坂本 友紀	日本旅行北海道		添乗員

Ⅲ 研修視察日程

日次	月日	地名	現地時刻	交通機関	日 程
П		集合	12:15		空港内会議室にて出発式 (12時30分)
	11月26日	帯広空港 発	14:10	JL1154便	
1	11月26日	羽田空港 着	15:50		
	(水)			貸切バス	成田空港へ移動
		成田空港 発	19:50	QF22便	空路;シドニーへ 【機中泊】
	••••	シドニー 着	7:30		シドニーで乗り換え、ニュージーランドへ
ا ۱	11月27日	36	9:50	QF143便	
2		オークランド着	15:00	専用バス	到着後;ホテルへ
	(木)				【オークランドシティホテル】
	••••				朝食後;終日視察研修
		オークランド	終日	専用バス	①Marphona Farms (有機酪農経営 飲用乳製造・販売)
3	11月28日	ハミルトン	夕方		②Desley & Steve Mcgougan Farm (大規模酪農家)
	(金)				③Federated Farmers Hamilton (ニュージーランド農民連盟ハミルトン支部)
					【キングスゲートハミルトン】
					朝食後:オークランドへ移動
	11月29日	ハミルトン	69	専用バス	その後、オークランド市内視察
4	(+)	オークランド	午前	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	(地元スーパー・オークランド博物館・マウントイーデン等)
	3.5-4.80				【オークランドシティホテル】
					朝食後:出発までオークランド市内視察
		オークランド	14:00	OF144∰	(ハーパープリッジ・バーネルロード等)
	11月30日	シドニー 着	15:35		昼食後;シドニー経由でメルボルンへ
5	11710011	- 98	17:15	QF451使	MACRO TO THE STATE OF THE STATE
	(日)	メルボルン	18:50	of analy	
		2000	10.00		【メルキュールメルボルン】
\vdash		メルポルン			朝食後:終日視察研修
		(71km)	終日	恵田バス	④Grain Coop Co.,Ltd. (穀物貯蔵・出荷港湾施設)
6	12月1日	(108km)	184.44	- W. C. S.	⑤Dark Farm (有機栽培農家 ワイナリー経営)
"	(月)	(128km)			EDUTATION OF THE PARTY OF THE P
	5717	メルボルン			【メルキュールメルボルン】
		メルボルン			朝食後:終日視察研修
	12月2日	(4.5km)	終日	専用バス	⑥Victoria Farmers Federation (ウィクトリア州農畜産業従事者連盟)
7	(水)	(198km)			⑦Wall Farm (Lyin Fild) (肉牛・綿羊・小麦生産農家)
		シェパートン	i i		[クオリティホテルパークレイク]
		シェバートン			朝食後:終日視察研修
		(22,1km)	終日	専用バス	⑧Cook Farm (畑作農家 精密農業への取り組み)
8	12月3日	(96,7km)	I MATERIAL DE		®Dajory Farm (肉牛マレーケレー種の繁殖・肥育農家)
"	(xk)	(257km)			到着後:ホテルへ
		メルボルン			【メルキュールメルボルン】
		メルボルン			朝食後:出発まで視察研修
				専用バス	⑩Qeen Victoria Market (メルボルン市で140年間続く市場)
9	12月4日		15:00		空路;シドニーへ
	(木)	シドニー	16:25	Q	到着後:ホテルへ
					【ザ グレースホテル】
		シドニー			朝食後:シドニー市内視察
10	12月5日				(ダーリングハーバー・オペラハウス・大聖堂等)
~	(金)	シドニー	22:20	QF21伊	夕食後;空路成田へ 【機中泊】
		成田空港	6:20	-Q	入国審査後;羽田へ移動
		発	8:00	貸切バス	
11	12月6日	羽田空港	9:15	7,77	
^^	(土)	デロエル 発		JAI.1153/8	直行便で帯広空港へ
	(1)	帯広空港	13:15	STEEL TOOK	帯広空港到着後解散式 解散
ш		用丛土佬	10.10		INVERSE WILLIAM WIN

《行程図》





シドニー ダーリングハーバーにて 2014年12月5日(金)

IV 研修視察報告

※注 1ニュージーランドドル(NZD) 110円1オーストラリアドル(AUD) 104円として換算(H26.12 現在)

1. ニュージーランド

(1) Marphona Farms (Pukekohe ワイカト地域)

有機酪農経営法人 飲用乳製造・販売

説明者: コーリー ハーリング 氏 (GM)

執筆者: 名波 秀毅(鹿追町農協)



日本を出発して3日目に、最初の滞在地オークランドより南のハミルトンを中心とするワイカト地域にある、ニュージーランド最大のオーガニックファームである Marphona Farms を視察しました。

現地での説明は GM のコリー氏にしていただきました。ニュージーランドの酪農家 戸数は約 14,000 戸で平均飼養頭数は 400 頭。内、オーガニック農場は 80 戸ですが、近年、消費者の健康志向の高まりなどを反映して、戸数は毎年倍増しているとのことでした。

オーガニック農場に認定されるには、3年間のプログラムを経ることが必要です。 乳牛の飼育については、飼料の無農薬・無化学肥料栽培、乳牛への抗生物質の無投与 が義務付けられており、個体別に記録が残されていなくてはなりません。審査では、 国際基準であるバイオグロと国内基準のアップル・クオリティをクリアする必要があ ります。審査は年2回行われ、政府から調査員が派遣されてきます。また、それとは 別に、月1回程度、フォンテラなど生乳販売会社から抜き打ち検査があるとのことで した。

ワイカト地域は天候に恵まれており、温暖で1年を通して草が育ちます。この牧場では、20年前からオーガニックに取り組んでいるとのことでした。経営規模は、放

牧地 2,000ha、乳牛 3,000 頭を飼育しています。従業員は 20 人で、50 頭のロータリーパーラーを 2 ヶ所所有し、年間 $700\sim800$ 万 ℓ を生産しているとのことでした(1 頭当たり日量 180ℓ 、平均体細胞数 12 万)。また、種牛を 30 頭所有しており、繁殖は自然交配により行われています。仔牛は約 $600\sim700$ 頭生まれ、内、25%強は 10 才まで飼育し、年間 $300\sim400$ 頭更新されるとのことでした。



通常の買取乳価は 50 セント/0ですが、オーガニック牛乳は $60\sim65$ セント/0と、2 割ほど高くなっています。乳牛の市場価格は、雄仔牛(生後 7 日目)が約 70 ドルで肉牛農家に売られます。雌成牛の価格は 2,000 ドル、廃用牛は $500\sim600$ ドルで取り引きされています。

敷地内にある生乳工場では、近隣のオーガニック酪農家から持ち込まれる分と合わせて、約2,500万ℓの飲用乳を生産し、Green Vally ブランドとして国内で販売しているほか、一部は輸出しています。このブランドは、国内で消費されるオーガニック牛乳の95%のシェアを有するトップブランドとしてよく知られており、最近、チョコレート味が大ヒットして生産が追いつかない状況になっているとのことでした。



(2) Desley & Steve Mcgougan Farm (ハミルトン市郊外)

大規模放牧酪農家

説明者:スティーブ マクゴーギャン 氏(共同経営者)

執筆者:高木 正志・高橋 和也 (浦幌町農協)



視察初日の2ヶ所目はハミルトンにある大規模酪農家を訪問し、牧場主のスティー ブ氏より経営状況について説明を受けました。

現在 100ha の農地を所有し、2 名で 270 頭飼養していますが、法律により労働者には年間 5 週間分の休日を与えなければならないということで、この日はスティーブ氏一人で作業していました。搾乳時間は通常 1 日 2 回の搾乳を 2 時間かけて行い、朝は 5 時から、夕方は 3 時からやっているそうです。 1 年の内 10 ヶ月間搾乳し、出産時期は 7 月です。搾乳のない期間は、別荘で釣りやハンティングを楽しんでいるとのことでした。雄は 4 ヶ月齢まで飼養し、 $80\sim100$ ドルで売却しています。雌の仔牛は 7 月から 5 月 1 日まで他の農場に飼育してもらい、1 週間 1 頭当たり 9 ドル支払っているそうです。現在は 60 頭程度預けているとのことでした。



放牧については、雨季である冬は 135 頭にグループ分けをし、パドックを 120 日

かけるローテーションを組んでいますが、乾季である夏は牧草が伸びないため、18日間と短いサイクルを組んでいるそうです。 圃場は電気柵で囲っておりパドックは 2ha を 1 個で換算すると 50 箇所あるそうです。主要な餌は牧草とパームカウネル(椰子油の搾りかす)で、マレーシアから年間 100 トン輸入しており、年初めに契約輸入します。今年は 1 トン当たり輸送代込み 288 ドルで契約したとのことでしたが、現在は為替の影響で 1 トン当たり 208 ドルに値下がりしショックを受けていました。周りには、今の安いうちに来年分をストックするつもりで一部を購入したものの、乳代が7ドルから5ドルに下がったことで、飼料の購入を控える人が出てきているそうです。サイレージも使用していますが、12·1·2 月に収穫し、夏場の牧草が伸びない時期に補助飼料として与えています。収穫と調整はコントラクター会社に委託しているそうです。牧草地には、春と秋の2回化学肥料を撒き、年間約66,000ドル(1ha当たり660ドル)かかるそうです。その他に毎年7.5haの圃場にデントコーンを4箇所程度作付し、翌年には牧草を作付する輪作体系をとっているとのことでした。

スティーブ氏は牧場経営が自分のライフスタイルに合っているとも話していました。25 年前に営農を始める前は、煉瓦関連の会社に勤めていたそうなので日本で言う脱サラをして農業を始めたことになります。しっかりした経営体系を確立しているからこそ、2人でこの規模の経営を行えると感じました。



(3) Federated Farmers Hamilton (ハミルトン市)

ニュージーランド農民連盟ハミルトン支部

説明者:ジョン ホーチ 氏 (ハミルトン支部次席代表)

執筆者:山本 昇(帯広大正農協)

ニュージーランド農民連盟支部のあるハミルトン市は、ワイカト地方では最大、国内では4番目に大きい都市で、北島では最大の農業地区です。ニュージーランド農民連盟は、国内に28,000戸の農業者とその関連団体等を会員とする重要な組織で、主に農業に係るアドバイスやサポート、関連団体等との連携・情報交換などを行い、農

業生産者や輸出業者の立場から意見・要望などの代弁者としてファーマーズユニオン 発足時から始まる 115 年の長い歴史があります。



当農民連盟への加入は任意で、組合的な要素が強くなるため加入の可否は強制しておらず、加入料は年間 500 ドルです。加入率は国内の 40%を占めており、政府並びに自治体と話し合いの場を持つなど近い関係にあり、新しい法律(ルール)に「いかに適応するか」について上部組織と交渉する役割を担っています。

現在は、農畜産物の安全性や品質管理、環境に配慮した営農活動など、乳製品に関連する生産管理について非常に気を配っており、家畜に与える飼料からはじまり、生乳の乳質検査の実施など、日本と同様に食品の安全性への関心の高さが伺えました。

また、環境保全については、ゴミの焼却等による CO₂ の削減への対策や、河川の水質向上のための植林の推進、牧場からの糞尿流入防止の対策、家畜へ尊敬の気持ちをもって対応するなど、将来の農業への継続性を重視した対応が行われていました。



ニュージーランドの輸出の状況について、過去には「イギリスの食料倉庫」といわれていたことがあるほど農畜産物の輸出が盛んで、国内で生産されるラム肉の93%・ 牛肉の82%・乳製品の95%が輸出に充てられており、中でも、乳製品は国内の総輸 出量の25%を占めているという説明がありました。環太平洋連携協定(TPP)については、「日本は高い関税がかけられていて厚い壁となっているが、我が国が輸出に依存する生産体制である以上、乳製品が関税撤廃の品目に入っていないなら合意しない」との立場とのことでした。一方、只今のTPP交渉が停滞状態であることに対しては、「交渉の詳細については知らされていない」と断った上で、今後も政府は農家の考えを踏まえ進めていくだろうとの説明がありました。

2. オーストラリア

(1) Grain Coop Co.,Ltd. (Geelong メルボルン市郊外)

穀類貯蔵・出荷港湾会社

説明者:アラン ランドル 氏(穀類品質管理責任者)

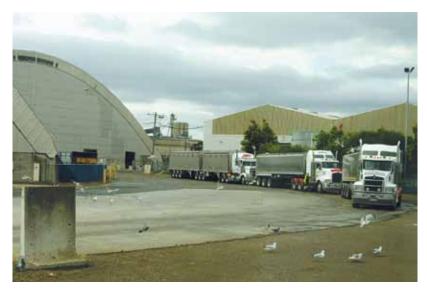
執筆者:山川 弘悦(音更町農協)



メルボルン市から南西に約75km、ヴィクトリア州第二の都市ジーロングがあります。ここの港に隣接して巨大な倉庫業を営むグレインコープ社(従業員数23名)を視察しました。早朝に、ここを訪れると大型牽引トラックがずらりと20台くらい並んで始業時間を待っていました。私達はバスで構内を案内されました。

グレインコープ社は貸倉庫業者で、契約した会社の穀物等を出荷までの間、一時保管する役割を持ちます。敷地面積は12ha。1930年に18万トンの容量を持つ162本の穀物用コンクリートサイロが建設されました。このサイロでは大麦・小麦・菜種が保管され、必要に応じて出荷されていきます。このうち大麦の一部は2基のモルトハウスで発芽・乾燥され、ビールの原料となるモルトとして毎日330トン出荷されており、一部は日本にも出荷されています。

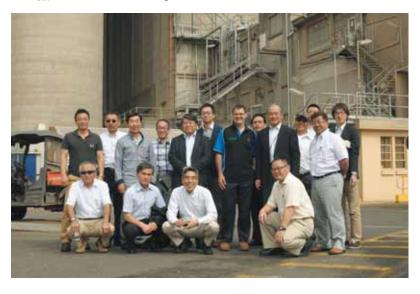
サイロのほかに 3 棟で 6 万トン容量の巨大 D 型貯蔵庫が備えられていました。これらの貯蔵庫には、ヴィクトリア州の木材から作られた年間 50 万トンのチップを受入れ、韓国・中国・日本に輸出しています。また、アルゼンチン等から輸入された、尿素・ゼオライトなど 8 種類の肥料成分も保管されていて、その縁をバスで通り抜け



て観察させていただきました。中では何台もの大型ショベルが砂利山のように高く肥料を盛り上げており、あまりの大きさに私たちは驚いてしまいましたが、大きさについては説明者のアラン・ランドルさんは知らないようで残念でした。

穀類の受け入れに当たっては、搬入時にオートサンプラーでサンプリングし、品質 基準に適合していることを確認してから保管されます。大麦の検査項目は、水分 (12.5%以内)・灰分・タンパク含量・容積重等で、細かい基準は時間がなく教えてい ただけませんでしたが、水分については、概ね 11%以下で入庫すると言っておられま した。

出荷は、バラ積み・コンテナ積み双方に対応できるようになっていました。バラ積みの場合は、専用埠頭に船を引き寄せる装置が装着された2本のベルトコンベヤーが用意されており、倉庫から船まで直接積み込みできるようになっていて、効率よく出荷できるように整備されていました。



(2) Dark Farm (Blampide メルボルン市郊外)

有機栽培農家 ワイナリー経営

説明者:ジョン ダーク 氏(経営者) 執筆者:柴田 昌美(音更町農協)



メルボルン市郊外にある105年前から続く農場の4代目ダークさんより話をうかがいました。この農場は、ダークさん兄弟3夫妻と常雇い従業員2人のほか、ブドウの収穫が忙しいときなどはアルバイトを雇って経営されていました。

この地域の土壌は鉄分が豊富な赤い土で、主に馬鈴薯の生産を行っているそうですが、ダークさんの農場では、30年前より体の健康を考え有機栽培に転向し、80haの土地に防風も兼ねた区画割用に高い木を植え、そこにぶどう(2ha)・栗(2ha)・りんご(1ha)・根菜類(馬鈴薯・ビーツ・人参)・カリフラワー・キャベツ・トマト・トウモロコシ・ハーブ等、いろんなものを栽培していました。

また、肉牛(アンガス・フェレホード・ブラーマン) $80\sim90$ 頭・肉用羊(毛刈りをしないドーパ種)300 頭・ニワトリ(採卵)120 羽を飼育し、すべて無農薬・無化学肥料・無合成薬剤で生産していました。



生産物は、通い容器を使う「ボックスシェイムシステム」と呼ばれる独特販売方法で、 契約者約 250 戸に週 1~2 回程度、箱に季節の野菜(10 種類程度)入れ 30 ドルで販売 していました。ちなみに、箱に何を入れるかは農場で選定し、リクエストは受け付けていないそうです。一般に有機栽培された生産物は、販売単価が高くなるので、都市部の消費者に一定のニーズはありますが、販売量は伸びにくいものですが、この方式だと、中間マージンを大幅にカットできるので、比較的価格は安く抑えられるので、契約いただいている方には非常に好評のようです。その他に農場レストランを営み、その食材に供しているほか、ワイナリーも経営していました。

また、畑も見せていただきました。多少生え切れした馬鈴薯がありましたので、種馬鈴薯の更新についてお尋ねすると、収穫量の3分の1を自家種子として使用しているとのことでした。この中には、おそらく有機栽培農家への販売用として供している分も含まれていると思われます。収穫作業はデガーで掘り手作業で行っていました。農業機械も畑の隅に幾つかありましたが、全ての機械は古く、長く使っているようでした。また週末には、都会の人達がこの農場を訪れ、農業体験を通じて有機栽培の野菜等に触れる「体験農場」のようなこともやっているとのことでした。



(3) Victoria Farmers Federation (メルボルン市)

ヴィクトリア州農畜産業従事者連盟

説明者: グレアム フォード 氏 (CEO)

執筆者:三津田 隆義(大樹町農協)

オーストラリアに入り視察2日目、メルボルン市にあるヴィクトリア州農畜産業従事者連盟を訪問させていただきました。当連盟は100年ほど前に発足。6,500戸の農家が加盟しており、農家の要望を取りまとめて州政府や国へオーストラリア全体の農民連盟と一緒に陳情運動を行っています。また、仕事を探すためのアドバイスの他、災害に対する救済活動も行っており、オーストラリアは山火事が頻繁に起こる国なので、被災した生産者対して飼料の支援をしているとのことでした。

この日はグラム・フォード氏(CEO)より、様々なテーマの中から肉牛事情を中心に 説明を受けました。オーストラリア全体での牛の飼育頭数は 2,670 万頭、うちヴィク トリア州は 180 万頭の肉牛・100 万頭の乳牛が飼育されています。その頭数も干ばつの影響で減少しているそうです。生産額は 74 億ドルで、うち 50 億ドルを輸出しており輸出相手国は、オーストラリアの畜産業にとって重要な地位を占めていると認識されていました。日本への牛肉輸出の状況ですが、 $2013\sim2014$ 年は約 24 万トンとほぼ変わらないものの、競合国である米国で飼育頭数が減少して豪州産牛肉の需要が高まっていることもあり、輸出額は 4 億 92 百万ドルから 5 億 43 万百ドルと 10%ほど増えているとのことでした。



品質管理については、食肉加工業者独自で高い基準の品質保証システムを構築しています。他の国同様、家畜疾病の発生はとても脅威に感じており、例えば口蹄疫が発生すると、約500億ドルの損失が生じ計り知れない打撃となります。また、環境に対してよいことを行っていれば、品質が確保され、生産者の意識も変化することから、屠畜後に歩留等の数値情報を提供することで品質の向上を図るなど、環境を清潔に保ち、高品質、安全な食品の提供を実践することで差別化を図っていました。



牛肉の関税を段階的に削減する日豪経済連携協定(EPA)については、米国での豪州 牛肉の需要増、中国との自由貿易協定(FTA)による輸出増、円安ドル高となっている 情勢などから「EPAで関税が引き下げられたとしても、日本への輸出量は現状と変わらないと思う。日本は交渉が難しい国、日本の農業を理解して行動をおこしていきたい。」と話されていました。

(4) Wall Farm (Lyin Fild) (Gowangardie シェパートン市郊外)

肉牛・綿羊・小麦生産農家

説明者:ウォール兄弟(経営者)

執筆者:畔木 主・坂根 昌幸(大樹町農協)



12月2日、メルボルンから200km ほど北へ行ったシェパートン市郊外のゴウワンというところに、視察先のWall Farm(農場名: Lyin Fild)はありました。この農場は、Wall ファミリーで経営されており(農場主である、サイモンとリチャードの双子の兄弟ご夫妻と、ご両親の3家族共同経営)、肉牛・綿羊・小麦などを生産しており、総面積は1,800haです。農場の歴史は古く、1880年代に入植し、現在は5世代目とのことでした。

穀類の栽培は、小麦(360ha)、キャノーラ(菜種)(200ha)、オーツ麦(100ha)が中心で、 5月に播種し、10月末~12月にかけて小麦・オーツ麦・キャノーラの順で収穫していく とのことでした。収穫にかかる日数は $2\sim3$ 週間です。また、播種・収穫等の作業に使 うトラクターは GPS を搭載しており、作業精度の向上を図っていました。3 作プラス放牧地で輪作体系を取っており、圃場 1 区画は $32\sim60$ ha。収量は小麦で 5t/ha、キャノーラで 2.5t/ha とのことでした。売り渡し価格は、小麦 440 ドル/t、キャノーラ 240 ドル/t です。

畜牛については、アンガス種を $200\sim220$ 頭繁殖させており、雌は繁殖用として残しますが、雄は $8\sim9$ ヶ月(体重 $300\sim400$ kg)になると肉用として販売するほか、一部は近隣農家に肥育用として販売します。また、種牛も 10 頭ほど飼育しており、自然交配で繁殖させていました。



綿羊については、メリノ種(羊毛用)1,200 頭を飼育しており、内 1/3 を食肉として販売しています。繁殖は年 2 回(種付けは 2 才から)で、1 回に 2 頭ほど生まれます。5 才まで羊毛を取ったあと、繁殖用にする分を除き、肉用として出荷します。肉は 5 ドル/kg 程度で売れるそうです。羊毛は、メリノウールとして 7~8 ドル/kg で売られます。通常、3 月頃に 1 日 150 頭ほどを、専門業者に委託し毛刈りを行います(4 人ほど)。 1 頭当たり 4~5kg の羊毛が取れるとのことでしたが、足の付け根など、汚い部分は別に取り引きされるので、メリノウールとしての歩留は 70%ほどとのことでした。今回、毛刈りの時期ではなかったのですが、特別に実演していただきました。

日本との大きな違いを感じたところは、これだけの面積を家族労働だけでこなしていること、圃場・施設・機械にあまりお金をかけずに生産しているという点です。また、干ばつの強いオーストラリアでは、水が非常に重要で、農場内に 70 ヶ所の溜め池を設け、水の補給に充てているとのことでした。

最後に、Wall ファミリーの皆様には、収穫期という多忙な時期にもかかわらず、 毛刈りや小麦収穫の実演など、いろいろご配慮いただき、深く感謝申し上げたいと思 います。



(5) Cook Farm (Pine Lodge South シェパートン市郊外)

畑作農家 精密農業への取り組み

説明者:デビッド クック 氏(経営者)

執筆者:佐藤 信敏・瓦井 博(上士幌町農協)



12月3日午前、シェパートン郊外で畑作経営をしている Cook Farm を視察し、 農場主の David Cook 氏より説明を受けました。100年ほど前から続く農家の5代目 で、元々メルボルン近郊で牧場を経営していましたが、1974年に現在地へ移住して きたそうです。一部共同で1,100ha の畑で、小麦・キャノーラ(菜種)・そらまめ (Faba beens) などを栽培しています。1,100ha の内800ha が David 氏の所有で300 ha は 共同所有。1,100ha を3区画に分けてコンピュータ管理(土質や履歴など)していて、 David 氏・父親・スタッフの3人で作業をしています。今年は、小麦400ha・ナタネ 300ha・そら豆240ha・サフランなどを作付けていました。

基本的に、小麦・ナタネ・小麦・そら豆の4年輪作ですが、間に夏の作物を栽培して、6年輪作にしたいそうです。今夜雨が降ったら夏の作物を蒔きたいと言っていて、6年間ほど試行してみた結果、3年は良かったが後3年はうまくいかなかったとのことでした。

6年前までは 160ha の灌漑施設を持っていたので、牧場をやっていたようですが、 政府の方針でカットされたため(小規模農家にも平均的に水を分配するために政治的 に水を止められた)畑作専業になったとのことでした。

Cook Farm の最大特徴は、Cross Slot drill machine(作業幅 9m、牽引式※)という機械を使い、GPS とコンピューター管理を活用した精密不耕起栽培(NO TILLAGE SYSTEMS)を実践していることです。車庫の屋根の上には GPS 用のサテライトアンテナが立てられていました。車庫から機械を出していただき、説明を受けたのですが、この機械の特徴は、シングルコールタで作物残渣物が邪魔にならない・播種部が 1条ずつ独立しているので多少の起伏が問題にならない・鎮圧輪に圧力センサーが装備されていて適度な鎮圧で、土質の堅さに関係なく一定の播種深度で播種できることです。

価格は、3,000 万円程で近くの農家と共同所有していました。付属装置として、種子タンク $(2 \ h \ v)$ ・肥料タンク $(2.5 \ t)$ ・土壌施用する薬剤タンクが装備されていました。

小麦の播種量は、125 粒~200 粒/㎡で、種子は自家更新。2~6 年サイクルで新品種に更新しているとのことでした。5 月に播種して 11 月に収穫、今年は一昨日終了していました。収穫の終わった小麦畑を見せていただいたところ、赤茶けた硬い土質でした。前作の畝と畝の間に播種(高精度の GPS を活用することで可能になっていると思われる)することで連作障害や、前作からの病害を防いでいます。収穫残渣物は、以前は燃やしていたが Cross Slot を導入してからは、残渣物が播種の邪魔にならないので、燃やさないで済むようになったとのことでした。また残渣物が地表をカバーするため乾燥を防ぐ効果もあるようです。



スプレヤー(自走式)ついても車庫から出して竿を広げて説明をしてくれました。竿の長さは 27m で、もう 1 台 45m の機械も所有していました。小麦播種前のラウンドアップ散布や用面散布などが主な作業で、病害虫防除はほとんど行わなくてもいいようです。作業スピードは $12km\sim25km/h$ で、散布水量は $150\ell\sim120\ell/ha$ 。5 種類のノズルが取り付けられているそうです。

畑は、柵で囲まれていて所々に大木が生えています(牧場の名残か?)が、作業の邪魔にはならないと言っていました。オーストラリアでは、環境保護のため簡単に木を切ってはいけないそうです。

説明が終わった後、バスで移動して菜種の収穫が始まった畑を見せていただきました。ゲートを開けて中に入るとテーブル幅 35 フィートのコンバイン(クラース社、レキシオン 750、テラトラック仕様)が作業を行っていました。JCB トラクターが引くトレーラーが伴走受けをして、入り口に止めてある輸送用大型トラックに投入するという流れです。通常コンバインから出されるカラは散布するそうですが、この畑ではまとめて排出されていました。雑草退治のため、焼却処理をするとのことでした。コンバインのオペレーターはスタッフで、お父さんが JCB を運転されていました。

その後、David 氏の奥様手作りのケーキをごちそうになり、野生のカンガルーが見

られると言うことで、小麦収穫後の畑の中をトレーラー(私たちのスーツケースが納められている)をひいたバスを爆走させ、10頭ほどのカンガルーの群れを見せてくれました。尚、ここではカンガルーは害獣扱いされていました。

1 時間半にわたる説明と質問攻めにも丁寧に答えていただき、ケーキなどの「おもてなし」も受け、別れ際に手を振って見送ってくれた David 氏に感謝申し上げたいと思います。農業補助金・農業共済制度などの補償制度がない中、少ない水を頼りに厳しい営農をする中、Cross Slot Machine と GPS を活用した精密不耕起栽培を実践することで、コスト低減を図りながら環境に負荷を掛けない取り組みを実践している様子は、広大な大地に根付くオーストラリア農業のスケール感と、政府の支援を受けずに自立する農業者たちのたくましさ、力強さを垣間見た気がしました。

※David 氏は Cross Slot machine のオーストラリアの代理店のようなこともしており、日本にも売り込みたいらしく、私達もパンフレットを頂戴しました。



(6) Dajory Farm (Grahamvale Road シェパートン市郊外)

肉牛(マレーグレー種)の繁殖・肥育

説明者:キャロライン マクレーン 氏(経営者)

執筆者:遠藤 泰志(十勝池田町農協)

研修も8日目を向え終盤となる12月3日、ヴィクトリア州メルボルン市北部に位置するシェパートン郊外で、肉牛繁殖肥育業を営む DAJORY FARM を訪れました。この農場は、10頭の種牛で1998年に創業、農場名の由来は3兄弟のダニエル氏・ジョシ氏・ロリー氏の頭文字をとったもので、次男のジョシ氏が中心となって経営しています。

この農場では約 61ha の農地を有し、肉用牛であるマレーグレー種など 450 頭を保有し、種牛・精液などの飼育・販売を行っており、冷凍精子や受精卵はヨーロッパ方面にも輸出をしているとのことでした。



オーストラリアの肉牛は、放牧による生産が主体で、フィードロットと呼ばれる肥育場で、穀物などを主体とした飼料を与えて生産される肉牛についても、フィードロットに移されるまでは、放牧で飼養されます。このため、干ばつにより放牧地の牧草が減少すると、牛の放牧が困難になることから、食肉用としての出荷が増加することになり、オーストラリアでは、干ばつが肉牛生産にも大きな影響を及ぼしているといえます。ここでは 450kg になったら売却しますが、生体でキログラム当たり 1.8~2ドル、枝肉では 3~4 ドルで取引されているようでした。



肉用品種であるマレーグレー種はショートホーン種とアバディーンアンガス種を交雑してできたオーストラリア固有種で、アンガス種に比べて性格はおとなしく、繁殖率が高く成長が早いことと、角がないことが特徴です。肥育は1日に2kgの体重増を目標にしており、糖分が重要であるとのことで、地元のチョコレート工場から出る粕を仕入れて飼料に配合して与えているそうです。マレーグレー種は小さく生まれ早く大きく育つことから、この様な目標となっています。やはり少しでも早く育てばコストが削減できる為、水にかかるコストが圧縮できるので重要であるとのことでした。オーストラリアの農場では共通の問題でもある水の調達ですが、水利権により限られ

た量しか供給してもらえません。この農場はワインの産地でもあるゴールバンバレーの灌漑施設から水を購入しており(契約数量 年間 300M 0 購入額 30,000 ドル)、この施設(ダムなど)は市役所管轄の民間会社が経営しています。

この農場は徹底した品質管理と人口受精プログラムを通じて品種改良を続けて、メルボルン市内で行われる農業祭(ロイヤルメルボルンショー)で「最高の雌牛」を受賞するまでになったとのことでした。マレーグレー種は日本の和牛に近い品種であり、オーストラリアでのシェアは約10%と、主流のアンガス種やヘレフォード種と比べて少ないですが、安定した需要があるようで、先述した餌においても独自の考え方があり、こだわりを持って飼育しているように感じました。



この日の昼食は自宅前のテラスにてバーベキューを振る舞っていただきました。ステーキ・ハンバーグ・ソーセージなど、この農場で作られたものばかりで、テラスに設置されている鉄板で豪快に焼いて下さり、大変美味しく、楽しいランチタイムとなりました。



(7) Qeen Victoria Market (メルボルン市)

メルボルン市で140年間続く市場

説明者:アン マーリー 氏 (専属ガイド)

執筆者:中村 賢一(音更町農協)



1878 年創業の歴史あるマーケットであり、敷地は 7ha というから驚きだ。700 の屋台に 1,000 店舗、平日だというのに朝から大勢の人で活気に溢れている。我々を案内してくれたのは専属ガイドのアンさん。時間も限られていたので、1 つの店には長居ができない。肉屋は 20 店ほどあり、何とクイーンズランド産和牛が 80 ドル/kg タスマニア牛が 40 ドル/kg 普通の牛肉が 20 ドル/kg だ。ちなみに音更ブランド「すずらん和牛」は 9,600 円/kg なので和牛対決としてはあまり変わらない。研修中オージービーフの普通のステーキを食べたが赤みで柔らかくとても美味しかった。





マーケット創業時はイギリスから輸入していたが、現在は国内産が圧倒的に多い。 野菜、果実類も豊富で日本のスーパーのようにパックに入ってない。バラでつまれている。マンゴー1 個 2.5 ドル これは安い! 馬鈴薯 3.5~4 ドル/kg。kg 単位の量り売りが多い。値段は日本と変わらないようだ。

移民が多いのでヨーロッパ、アジアなど様々な店がありツアー中に試食もできる。 チーズが美味しい、14 ドル/kg バター11 ドル/kg 日本より種類が多い。明治まで乳 製品を食べる習慣がなかった日本とは食文化の違いを感じた。



様々な人種の胃袋を満たすこのマーケット、地元の人も多かったが観光客も多い。 週末になると、歩くのも大変という賑わいだとか。年間 1,000 万人が訪れるというの も理解できる。最後にカフェでコーヒーをいただいた。随分サービスがいいと思った ら、ガイドツアーは 1 人 40 ドル、10 名以上で 35 ドルだ。そうとわかっていれば、 もっといろいろなものを試食したかった。日本人の控えめな性格が出てしまった。オ ーストラリアはワインも数多く生産している。私たちの班はそれには目もくれず野菜 売り場に行ってしまったが、別班はワインの試飲もできたというではないか。とても 心残りだ。

しかし、抜ける様な青空と、強烈な日差しを浴びたら、そんなことはどうでもよくなった。



オークランド マウントイーデンにて(ニュージーランド)

V 団員所感

十勝池田町農協 監事 久保 恵昭(団長)

今回、11月26日から11日間に亘り、第37回を迎えた十勝農協連海外研修に参加することができ、管内JAの役職員の方々との懇親を深め、大変有意義な研修を体験させていただきました。

11月26日、帯広空港において農協役職員14名・十勝農協連事務局・添乗員の17名で団結式を行い、羽田空港経由にて成田空港を夜に出発し、オーストラリアのシドニー空港を経由して、ニュージーランドのオークランド空港に翌日の午後3時頃到着しました。ニュージーランドでは北島の大都市オークランド中心部より、南東に約50kmに位置するワイカト地区周辺の酪農家や、ニュージーランド農民連盟(ハミルトン支部)を視察してきました。ニュージーランドは比較的雨が多く肥沃な火山性土壌と暖かい湿った気候が、羊・牛等の飼育に適しており「英国の食糧倉庫」として、羊毛と乳製品の輸出を基盤とし発展してきたとのことです。なだらかな丘陵地と広大な牧草地(放牧地)の緑が印象的でした。



オークランドの街並み (ニュージーランド)

オーストラリアでは大陸南東部のニューサウスウェールズ州、ヴィクトリア州のメルボルンを中心とした酪農家やヴィクトリア州農畜産業従事連盟を視察しました。オーストラリアは国土の約5割が農用地ですが、降水量が少なく(国土の3分の1以上が乾燥地帯)その約9割が放牧地となっており、灌漑用水への確保に大きな代償を払い大規模な農業が営まれています。広大な大地に根付くオーストラリア農業の迫力、政府の支援がない中で自立する農業者たちのたくましさを実感すると共に、良品質で安全な農産物の生産に取り組む農家と、その農産物を国内外へと販売する企業が、か

み合っているのを感じました。

両国とも TPP(環太平洋連携協定)交渉相手国であり、またオーストラリアとは EPA(経済連携協定)が来年 1 月から発効されることが決定していますが、両国とも次のターゲットは巨大市場の中国の胃袋だと感じました。

今回の研修において、すばらしい仲間に出会い親睦が図れたことは貴重な財産になったと思います。団員各位の協力を頂き研修が終えられました。事務局である十勝農協連の小池様、添乗員の坂本様に心より感謝を申し上げ、研修の結びとさせていただきます。

浦幌町農協 上浦幌支所 管理課長 高橋 和也(副団長)

この度、11 日間の日程でオーストラリア・ニュージーランドの農業研修視察に参加させていただきました。私にとって非常に貴重な体験となり、また同時に刺激を得るものになりました。農業国という強いイメージの中、大規模経営や先進的な機械・技術を使用した農業が多数を占めているものだと予想しておりましたが、意外にも視察先の農家につきましては一般的な家族経営が多く、親近感がありました。また、両国とも TPP の交渉相手国であるため、団長の挨拶の度に妙な緊張感もありましたが、現状の農業経営に関する話を聞いてみると、私たちと共通する悩みも多かったように感じられました。その中の一つが後継者不足問題でした。若い方々の農業に関する興味が薄いため深刻だと聞いたときは驚きでした。日本においても今後農業を取り巻く環境が大きく変化していくことが予想される中、農業政策にいち早く対応し、農業経営が継続的に発展出来るような取り組みの必要性を感じました。

最後になりますが、今回の視察を受入れて頂きました視察先の関係者の皆様と事務局、添乗員の方々に大変お世話になり視察研修が無事終了できたことに感謝申し上げます。大変ありがとうございました。



オークランドで会食したレストラン (ニュージーランド)

带広大正農協 大正給油所長 山本 昇

今回、十勝農協連海外農業視察研修に参加させていただき、管内 JA の役員並びに職員の方々との懇親も含め、大変貴重な体験をすることができました。また、久保団長をはじめとする素晴らしいメンバーに恵まれ、終始和やかに楽しく視察研修を受けられたことに感謝いたします。

さて、今回ニュージーランドとオーストラリアを訪れましたが、ニュージーランドでは、環境について非常に力を入れ、それを守る姿勢が強い国なのだと感じました。住宅地にも必ず緑の多い公園があり、自然との共存や古き良きものを大事にするという国民性が強く印象に残っております。農業関連につきましても、有機農業(オーガニック)の実践や、農畜産物の安全性や品質管理の厳しさ、 CO_2 の削減、河川や水の大切さなど、「農村環境の活性化」に重点が置かれ景観を含む多面的かつ持続的農業を基本としていることに驚きました。

オーストラリアにつきましては、広大な乾いた大地がどこまでも続き、初夏だというのに枯草放牧地が時折目につき、農地や放牧地には灌漑用水が不可欠であることが納得できました。農家個々の作付面積も広く、主に肉牛・羊などの家畜や農産物は、小麦・大麦・キャノーラ(菜種)・野菜・果実などを栽培しておりますが、どこの視察先でも、水を大切にしている印象で、日本との自然風土の違いを感じさせられたものの、両国共に環境の違いはありますが「農業へ思い」を感じることができました。

今回の視察研修を終え、両国ともスケールの大きさに圧倒されましたが、十勝農業の技術力や生産力、高品質や安全性など、十勝ブランドをもっと向上させなくてはならないと思いました。

最後に、今回の経験を活かしながら知識の向上を図り JA 職員として業務を行って 参りたいと思います。また、参加の機会を下さいました農協役職員の皆様をはじめ十 勝農協連の方々に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。



ハミルトンの夕食「豚肉のグリル」(ニュージーランド)

大樹町農協 理事 畔木 主

ニュージーランドでは、十勝の初夏を思わせる緑や、緩やかな曲線を描く丘陵の景色は、心を穏やかにしてくれました。物価が高いのと、地価が高いのには驚かされましたが、是非もう一度訪れてみたいと思います。

オーストラリアでは、広大な景色に圧倒されました。しかし、大地は乾燥し、作物も十分育っていないように見受けられました。更に、水は政府に管理されており、各農場は高いお金を払って水を確保しているようでした。また、この国の物価も高く、特に水はビールとあまり変わらない価格でした。

どちらの国でも感じたことは、中国人が多く進出しているということです。日本では TPP について大騒ぎしていますが、現地では日本への関心は薄く、輸出国としては中国を最大の相手国として見ているとの印象を受けました。

一方、国土の広さでは適わないものの、技術と品質の高さで、日本の農業はこれからも生き残っていけるのではないかと感じました。

最後に、一緒に参加した皆さん、楽しい思い出をありがとうございました。



オークランド港 (ニュージーランド)

大樹町農協 監事 坂根 昌幸

今回、ニュージーランドとオーストラリアの農業視察に参加させていただきありが とうございました。

ニュージーランドは自分も放牧酪農を営んでいる関係で、10 年ほど前に放牧の勉強に1週間程度滞在したことがありました。当時と比べて、デントコーンの作付けやロールサイレージが増えた印象です。この国も夏の干ばつの期間に備えて、貯蔵飼料が必要になってきたようです。この国では、タイプの違う2農場を視察しましたが、有機酪農による乳製品の需要が、毎年かなりの勢いで伸びていることや、農地価格が

日本と比べても決して安くないことなど、興味深い話を聞くことができました。ただ、できれば実際の放牧管理や草地の状態などを、もう少し詳しく見てみたかったと思います。

オーストラリアは初めてでしたが、その規模の大きさ・広さには圧倒されました。 深刻な水不足の中、経営の中でいろいろなリスク管理や技術が導入されているようで したが、その一つとして、クロスロットタイプの不耕機播種機は非常に興味深いもの がありました。

最後になりますが、海外視察では通訳の方の力が、理解度の向上に占めるウエイトが大きいと感じました。次回以降についても、農業のことをある程度知っている方に依頼するなどのご配慮をお願いし、結ばせていただきます。



我々を乗せてオーストラリアを走り回ったカーゴキャリア牽引バス

大樹町農協 貯蓄共済課長 三津田 隆義

この度、第37回十勝農協連海外農業視察研修にて、11日間にわたりニュージーランド・オーストラリアの2か国を視察させていただきました。海外の農業視察は初めてで、大変貴重な体験をさせていただきました。果てしなく広がる農地を目の当たりにして、地元十勝の広い大地で育った私にとっても、そのスケールの大きさにただ驚くばかりでした。初めて見る多種多様で桁違いの大型農業機械、小麦生産農家では私たちのために小麦の収穫作業を実演していただきその処理能力の高さに圧倒されました。

また、新たな先進技術を導入して、大規模農業に挑戦されており、乾燥地帯で水不足の環境の中、様々な工夫、大変な努力をし、広大な大地に適した農業を実践されていました。日本の農業がいかに自然環境に恵まれている中で行われているのかを再認識させていただきました。

今回の農業視察にあたり、関係機関や視察先の関係者の皆様と事務局の小池様、久

保団長はじめ視察団の皆様、大変お世話になりました。また、このような貴重な機会を与えていただきました十勝農協連を始めとする、各関係各位様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



延々と転がる牧草ロール(オーストラリア)

鹿追町農協 理事 名波 秀毅

この度、11月26日から11日間の日程で、第37回十勝農協連海外農業研修視察に 参加さていただきました。

ニュージーランドは起伏が多く草地が青々としていましたが、オーストラリアは平 坦で広大な草地全体が干ばつ傾向にあり、一面が枯れ草のように目に入ってきたのが 対照的で、印象に残りました。

両国とも、農業後継者問題は深刻なようで、若者は都会に集まる傾向が強く、農家人口の減少が懸念されているとのことでした。また、オーストラリアでは農業用水を確保するために、高額な水利権を取らねばならず、いくら土地を持っていても水がないので生産量が上がらない実態もあるようで、結果的に近年、農畜産物の生産量が頭打ち〜減少傾向にあると聞き、この点ではまだ日本は恵まれているのかなあと思いつつ、輸出国・輸入国という立場の違いはあるものの、実態は厳しいものがあると感じました。一方で、規模が大きいながらも、家族経営が中心で、少ない人でこなしていることは、私達も見習うべきことがあると思いました。

最後になりますが、視察を受け入れていただいた関係者の皆様、十勝毎日新聞社の伊藤さん、事務局・添乗員の方々を始め、一緒に研修に参加された皆様には、大変お世話になり感謝いたします。また、このような貴重な機会を与えていただいた、JA 鹿追町および十勝農協連、そして関係各位に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。



これぞオージービーフ(オーストラリア Dajory Farm にて)

音更町農協 監事 山川 弘悦

この度の視察研修で、ニュージーランド農民連盟とオーストラリアのヴィクトリア州農畜産業従事者連盟を訪問し実態を聞くことができました。二つとも農業者で構成された組織ですが、大きく違う点がありました。それは、国・政府・一般国民から支持・信頼されているかどうかと言うことです。ニュージーランド農民連盟は、水・空気などの自然環境から動物の幸福までも考えて提言する組織で、政府から意見を求められるほどの信頼関係を築いています。一方オーストラリアの方は、国民の数パーセントにも満たない農業者の意見は大多数の国民には関心をもたれていないということでした。私たちの農協組織も後者に近いのではないでしょうか。「自分たちの利益を守るだけの組織となってはいないか。自然環境を守り国全体のバランスを考えた議論をしたことがあるだろうか?」と言う疑問がわいてきました。今、農協改革が叫ばれていますが、ここも改善すべき点の一つかも知れません。



メルボルン市の市電 (オーストラリア)

もう一つ祖国を離れて感じたことは、「日本はこのまま工業大国の道を進んで良いのだろうか。工業大国は物欲を満たすだけであって、これからの日本は食と心を満たす農業大国を目指すべきなのではないだろうか?」と言うことです。二つの国を比較して見る機会を得てそんなことを考えさせられる研修となりました。

最後に、久保団長をはじめ団員並びに関係機関の皆様に、心より感謝申し上げます。

音更町農協 監事 柴田 昌美

今回 11 日間の日程でニュージーランド・オーストラリアと十勝農協連海外農業視察研修に参加させて頂き、貴重な体験をさせていただきました。

日本からニュージーランドと長時間の移動で非常に疲れましたが、現地に降り立つと心地良い暖かさと風、うねりのある山々、どこか地元を思わせるような風景でした。こちらの農業者はライフスタイルを一番大切にしているようですし、また、オーガニックに取り組んでいる酪農家も多いとのことでした。日本とは違い広大な土地があり気候と放牧による飼育によってのものと感じました。

オーストラリアでは、どこまでも続く平坦で広大な土地が広がり、見渡す限り放牧地・耕地ばかりで農家らしい機械庫のある家が見当たらず、農作業風景もあまり見えませんでしたが、研修先では小麦刈・なたね刈と私達の為に見せて頂き、非常に大きな刈取部のコンバインで高速で止まることのない様子に驚きました。また、水不足の問題で高額な水利権問題・後継者問題と、様々な課題があり生産量が減少する傾向にある実態を知ることができました。

最後に、久保団長をはじめ団員の皆様、関係機関の皆様にはこのような貴重な経験 をさせていただきましたことに、心より感謝申し上げます。



水のみ場に集まる牛 (オーストラリア)

音更町農協 監事 中村 賢一

17 名を乗せたカンタスは南半球へ飛び立った。オークランド空港は青い空と緑の 大地で歓迎してくれた。やっと研修が始まるんだと胸が騒いだ。

オークランドからハミルトンという大酪農地帯へ移動だ。どこまで行っても一面緑の牧草地だ。丘陵地帯なので眺めのよさそうな場所には家が建っている。牛や羊が幸せそうに草を食んでいる。

Green Valley というブランド牛乳を生産する 2000ha, 3000 頭の広大な有機酪農ファームでは餌も牧草だけ、化学肥料も使用しない放牧酪農です。牛乳を試飲したが味が濃く美味しかった。スーパーでは 20が主流で売られている。

ハミルトンを中心都市とするワイカト地区は、比較的雨も多く土壌も良い為、ニュージーランドを支える酪農地帯となっているようだ。農地価格は 60 万円/10a というから驚きだ。このようなすばらしい場所なのだが後継者不足のようだ。どの国も変わらず若者は都市に住みたがるようだ。

ニュージーランド最大都市オークランドというが、シドニー・メルボルンに比べればあまりにも小さい。移民が多いが最近は中国人が増え、土地も急上昇だとか。近郊のたいしたことのない平屋が2億円もするという。中国の世界侵略が進んでいるのが実感できる。

研修先ではとにかく、皆さん積極的に質問する。すばらしい姿勢だ。時間が足りない。また、この通訳をしてくれるガイドさんが素晴らしかった。農業の専門用語などもすらすら訳する。おかげで有意義な研修ができた。高木さんが最後に干支を聞いていたのが微笑ましかった。それほど充実したニュージーランドでした。

一路カンタスはオーストラリアへ。この大陸は乾燥しているので水が重要だ。ため 池や水を引くパイプ、バカでかい散水機械がある。視察先はメルボルン近郊、牧草も 生えているし牛も肥えている。内陸に比べれば天国のようだ。

平均 1000ha で小麦 菜種 肉牛などを生産している。ASW の収穫を見せてもらった。雨が少なく乾燥しているので病気も出ない、虫も少ない。畑一面そろっている。 子実は白く大きい、高品質だ。小麦とはこういうものかと驚く。しかし、これだけ高品質なものを作っても、船でのポストハーベスト、残留農薬が気になる。

視察先の農家はとてもフレンドリーにもてなしてくれた。ここでも質問は積極的だ、時間が足りない。小麦や菜種の収穫を見せてくれたり、畑をバスで走りカンガルーを 追いかけたり、貴重な体験ができた。

団員の皆さんは和やかで時には賑やかに、和気藹々と過ごしていました。このメンバーの一員で光栄です。最後になりますが、研修に参加させていただいた各関係機関、家族に感謝します。ありがとうございました。



アンガスビーフのステーキ (オーストラリア)

上士幌町農協 理事 佐藤 信敏

この度、11 日間の日程で、ニュージーランド・オーストラリア視察研修に参加させていただき、大変貴重な体験をすることができたと同時に、管内 JA 役職員の方々と、研修を通して交流・情報交換することができ、刺激を得ることとなり感謝申し上げます。

さて、今回の視察先は TPP 交渉国として、十勝農業において大変影響の大きな農業大国でありました。

ニュージーランドは広大な土地に様々な農作物を耕作し、放牧酪農も技術確立されていますが、近年酪農家の増加と大規模化、更に穀物給与による生産増もあり、一層輸出力が高まることが想定されます。また、政府と農業者がコンタクトを取り、環境問題等、その方向性をコントロールし、農業者の生活にもゆとりやプライドを感じました。後継者問題等の課題に対し、農業者のライフスタイル等、我々が目指す魅力ある農業の方向性として参考にすべきと感じた次第です。

オーストラリアは、緑の大地であったニュージーランドとは一変し、乾燥した赤い大地の感が強く、メルボルン・シドニーに人口の 40%が居住する一方で、農業においてはウオーターライズの設定により面積よりも水資源が重要な要素となっておりました。肉牛頭数は干ばつの影響で前年対比 8%減少しているものの、価格上昇によって輸出額は増加し、日本向けに生体和牛・F1 で 15,000 頭を輸出しているとのことでした。畑作において、不耕起栽培と GPS を活用した大規模経営は、今後の十勝に於いても技術的展開が成されるものと実感したところです。また、気象的な条件の違いもありますが、生産コスト面において、価格競争することの困難さを痛感致しました。オーストラリア農業は、人口 2,300 万人に対し 6,000 万人分の供給力を持つことか

ら、厳しい気象条件下にあっても、農畜産物輸出国として日本に大きな影響を及ぼす ことは確かと思われますが、ニュージーランド・オーストラリアともに最大の輸出国 は中国であり、今後も更に輸出量が増加すると想定しているとのことでありました。また、近年の世界的な異常気象など食料に係る環境は、人口増に伴う需要の増加とともに予断を許さない状況にあると予想されており、食糧安全保障の観点から、日本農業の生産基盤を守るために、生産構造の改革を進めて収益力強化を図り、魅力ある農業の姿を示すことが、持続的農業経営の確立と担い手の確保につながると考えるところです。

最後になりましたが、JA・十勝農協連・親切にそして温かく対応して下さいました 視察先の皆様に、心より感謝とお礼を申し上げます。



たまには和食も (オーストラリア)

上士幌町農協 監事 瓦井 博

このたび、十勝農協連主催によるニュージーランド、オーストラリア 11 日間の海外研修視察に参加させていただき貴重な体験をすると共に、見聞を広げることができました。

ニュージーランドは、島国ということもあり日本とよく似た気候で緑豊かな土地でした。雪の降らない温暖な気候のため、酪農形態は放牧酪農が主で、経営に対する設備投資が極端に低くでき、また労働力も搾乳時を除けばあまり必要のない高い生産性を誇っています。それに比べ日本の酪農は、機械・設備・飼料など高い生産コストを強いられる形態となっており、自ずと競争力は弱いと実感させられました。

オーストラリアでは、見渡す限り続く広大な乾いた大地に圧倒されました。私たちの地域の規模とは比較にならないほどの広大な土地での農業経営(平均経営面積は、1,000ha以上)を行っており、そのスケールの大きさに驚きました。温暖な気象条件のため、施設や機械への投資が低く抑えることができています。しかし乾燥地帯のため高額な水利権のもとで水を買って行う農業ということで、日本とは全く事情が異なっていると感じさせられました。

TPPへの参加協議が進んでいる中、これからの日本の農業にとっては今後の交渉結果次第では大きな影響を及ぼしかねない状況の中、両国の農業者及び関係者の話を聞き、現地の状況を視察できたことは大変有意義な研修になりました。

また、今回の研修に参加させていただき十勝管内各 JA の役職員の皆様と親交を深め意見交換できたことは大変有意義な経験となりました。

最後になりましたが、久保団長を始め、事務局、各関係機関の全ての方々に感謝申 し上げ、今回の研修の所感とさせていただきます。



オペラハウスにて (オーストラリア)

十勝池田町農協 生産資材課長 遠藤 泰志

この度、11 月 26 日から 12 月 6 日までの 11 日間に亘り十勝農協連海外農業研修に参加させていただきました。

私自身は、ニュージーランド、オーストラリアは初めてであり出発前は不安と緊張がありましたが、参加されました研修メンバーにも恵まれまして、視察が進むにつれて交流も深まり、大変有意義な体験をさせていただきました。協同組合といった組織がなく、国からの政策補助や奨励措置がないこと、日本と比べ物価が約3倍とのことで農畜産物の生産コストが大きく違うこと、乾燥地帯による慢性的な水不足など厳しい農業環境の中であっても、農家個人が自ら考えて販売先などと契約し営農を行っていることに、力強さと逞しさを感じました。併せて広大な大地で栽培された小麦や菜種を大型コンバインで収穫する風景を見て、ただただ圧倒されるばかりでした。また、後継者問題や水利権の問題など多くの課題を抱えていることを、実際に生産者の方から聞くことができたことは、非常に貴重な体験となりました。

今回の研修に参加させていただき、十勝管内の役職員の皆様と親交を深め意見交換ができたこと、この研修に参加させていただきました JA 十勝池田町および企画されました十勝農協連、日本旅行、関係各位に心より感謝と御礼を申し上げます。



メルボルン市内のマーケットのとある食肉店で… (オーストラリア)

浦幌町農協 理事 高木 政志

この度、第 37 回十勝農協連主催の海外農業研修視察に参加させていただきました。 ニュージーランド・オーストラリアは私にとっては全く初めての国々で、南半球なの で季節が全く反対ということもあり着る物の確保に苦労をし、オーストラリア迄飛行 機で約 9 時間 30 分時差 2 時間(サマータイム)・ニュージーランド迄はそれから 2 時 間時差 2 時間(サマータイム)という距離でした。

両国ともに TPP の相手国と言うこともあって私にとってはどのような国々なのかとても興味がありました。まず最初の訪問国のニュージーランドは国内生産の 30%を占めるワイカト地区の放牧で乳製品加工の施設を持った大規模オーガニック酪農家(法人)の視察で、今後健康志向もあってオーガニックミルクの需要があり年 100%の伸びで生産されていくという話でした。また一般の酪農家では今年乳価が 30%近く下がり儲からないと呟きながらも、今のライフスタイルが自分に合っていると仰っておられました。

オーストラリアでは畑作と肉牛を中心の視察でした、畑の面積が 35~55ha が 1 区 画なのですが、だんだん慣れてあんまり大面積には見えなくなってきました。また、想像とは違って風景が干ばつで茶色く枯れていることに驚きました。この国の農業は面積より水利権と言われる夏場における水の確保が重要だと聞かされました。両国とも、住宅のほかに所有する施設がパーラー、農具庫、収穫した麦を入れるサイロくらいで、トラクターなどの機械も 10 年以上前の物を大事に使っているように思えました。何といっても、若者の農業離れが進み後継者不足となって、特に酪農・畜産において生産量が下降している事を危惧していました。諺に〈百聞は一見にしかず〉とあるように来て観てイメージと違うことがこんなに沢山ある事に気づかされました。

見てきた事、聞いてきた事を今後の人生に何かと役立てていければと思います。帯 広空港に降り立った時、やっぱり十勝は良いところだと再認識をしました。終わりに、 今回貴重な経験と勉強をさせて頂きました農協をはじめ関係各位の皆様に感謝とお礼を申し上げます。また、久保団長・事務局の農協連の小池さんはじめ団員それぞれの皆様に深く感謝を申し上げます。



「羊が脱柵してるぞ!」と盛り上がった光景(オーストラリア)

十勝毎日新聞社 政経部 伊藤 亮太

この度、十勝農協連のニュージーランド・オーストラリア農業研修視察に参加させていただきました。はじめに、機会を与えてくださった十勝農協連の皆様、そして11日間の日程中、農業の知識が乏しい私にご指導、ご助言を与えてくださいました参加者の皆様に深く感謝申し上げます。



最後の晩餐 (オーストラリア)

印象的だったのは、オーストラリア・メルボルンのヴィクトリア州農畜産業従事者

連盟への訪問です。オーストラリアから日本への牛肉輸出量は、日豪 EPA の影響で増えると思っていましたが、連盟のグラム・フォード CEO はそのようには思っておらず、日本よりも中国に目を向けている雰囲気もありました。

世界的に自由貿易化の流れは進むと思われますが、世界人口が増大する中、必要なときに必要なだけ食料が手に入るわけではないことを改めて感じさせられました。日本の食料自給率が低迷するままでは、国際的な需給関係や生産状況で国内の食料事情は不安定な状態が続きます。自由貿易化の流れの中で、同時に日本の農業生産基盤の維持、強化の取り組みをいっそう危機感を持って行うべきだろうと感じました。

十勝農協連 企画室 調査役 小池 寿(事務局)

今回、視察団の事務局として参加しましたが、団員の皆様の規律ある行動と、視察 先での積極的な姿勢に感銘を受けました。

今回の視察先は、TPP 交渉相手国とあって、当初、多少緊張感を覚えておりましたが、輸出に依存する農業生産体制の脆弱性や、我々同様、農業後継者不足に悩んでいることなど、いろいろと問題を抱えていることを理解することができました。また、現地農場では家族総出で歓迎いただくなど、「おもてなし」の気持ちは、日本の専売特許ではないことを知り、人としても多くのことを学ぶことができました。

しかしながら、両国とも、随所で中国の影響力の強さを目の当たりにし、両国の主要な輸出品目である、乳製品と牛肉の生産量が横ばい~減少傾向にある実態と合わせて考えると、食糧供給に携わるものの使命として、輸入に依存しない生産体制の構築が必須であると感じた次第です。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さいました皆様、並びに、今回の視察を 滞りなく済ませることができた、視察団ご一同に深く感謝申し上げます。



シドニー ハーバーベイにて (最後の晩餐の後で)

VI ニュージーランド・オーストラリア農業の概要

※ 内容は農林水産省 HP から引用しています。

1. 概要

(1) ニュージーランド

- 全土が西岸海洋性気候に含まれ、湿度が低く涼しい夏と比較的温暖な冬は、 羊・牛等の飼育に適しており、「英国の海外農業」として羊毛と乳製品の輸出を 基盤として発展してきた。
- 国土面積は日本の 3/4 であるが、人口は 3.5%(446 万人 2012 年)にすぎず、市場が小さいため、国内生産量に対する輸出の割合が高いことが特徴である。特に乳製品については、生産量の 9割以上が輸出に振り分けられ、世界最大の輸出国となっている。
- 草地を最大限に利用した牛・羊等の放牧により、牛乳・羊肉・羊毛等の畜産物の生産が盛んである。その他、果実・野菜が主要な生産物である。

(2) オーストラリア

- 国土の約5割が農用地であるが、降水量が少なく、その約9割が放牧地となっており、各地域の気候や灌漑用水のアクセス等に応じた農業が営まれている。
- 主要な農作物は、さとうきび・小麦・大麦・牛乳・牛肉・羊毛等で、生産量は、 干ばつや国際価格の動向等に影響を受け、年により大きく変動している。

(3) 農林水産業の地位(2012年)

(単位:億USドル、%)

	ニュージーランド		オーストラリア		日 本	
	生産額	GDP 比	生産額	GDP 比	生産額	GDP 比
国内総生産(GDP)	1,713	-	15,644	-	59,602	-
うち、農林水産業	99	5.8	349	2.2	692	1.2
1人当り GDP(US ドル)	38,399		67,869		46,838	

資料:国連統計。

(4) 農地の状況(2012年)

(単位:万 ha、%)

	ニュージーランド		オーストラリア		日 本	
	面積	比率	面積	比率	面積	比率
国土全体	2,677	100.0	77,412	100.0	3,780	100.0
農用地	1,137	42.5	40,967	52.9	456	12.1
耕地(永年作物地除く)	47	1.8	4,768	6.2	425	11.2
永年作物地	7	0.3	40	0.1	31	0.8
永年採草・牧草地	1,083	40.5	36,159	46.7	-	-

(5) 主要農産物の生産状況

ニュージーランド オーストラリア 日本 2011 2012 2011 2012 20112012 小 麦 2,741 2,991 75 86 大 麦 799 822 17 17 さとうきび 2,518 2,596 111 馬鈴薯 53 55 235 250 キウイフルーツ 4238 3 牛 乳 1,789 2,536 910 747763948 牛 肉 1,201 62 211 213 5250 羊肉 47 45 0.02羊 毛 16 1737 36

表(3),(4),(5) 資料:FAO 統計

2. ニュージーランドの農林水産物貿易の概要

(1)輸出入農産物上位5品目(2011年)

(単位::百万 US ドル、%)

(単位: 万トン)

輸出			輸 入			
品目	金額	シェア	品目	金額	シェア	
全粉乳	2,947	19.9	調製食料品	319	11.9	
羊肉	1,939	13.1	パーム核油粕	188	7.0	
バター	1,397	9.4	粗糖	124	4.6	
牛肉(骨なし)	1,263	8.5	チョコレート等	121	4.5	
脱脂粉乳	859	5.8	小 麦	118	4.4	
総額	14,841	100.0	総額	2,672	100.0	

資料: FAO 統計 注: 林・水産物を除く

(2)日本との貿易(2013年)

我が国からの主な輸出品は、自動車・石油製品・鉱山用機械等であり、主な輸入 品は、アルミニウム・チーズ・果実・パルプウッド等となっている。

※農林水産物貿易概況

(単位:百万USドル)

	輸出	輸入	我が国の
	(日→NZ)	$(NZ \rightarrow \exists)$	収 支
総額・・・A	2,189	2,693	Δ504
農林水産物・・・B	32	1,938	Δ1,906
農林水産物の割合・・・(B/A) %	1.5	72.0	-

資料:財務省貿易統計

※貿易農林水産物上位5品目

(単位::百万 US ドル、%) 日本→ニューシ゛ーラント゛ ニューシ゛ーラント゛→日本 品目 金額 シェア 品目 金額 シェア たら(生・蔵・凍) ナチュラルチース゛ 537 25,423 13.1 16.8 いか(生・蔵・凍) 319 10.0 キウイフルーツ 21,284 11.0 ソース混合物 牛 肉 223 7.0 15,614 8.1 播種用の種等 192 6.0 繊維板 13,471 7.0 アルコール飲料 1454.5丸太 8,762 4.5 総額 総 3,191 100.0 額 193,789 100.0

資料:財務省貿易統計

3. オーストラリアの農林水産物貿易の概要

(1)輸出入農産物上位5品目(2011年)

(単位::百万 US ドル、%) 輸 出 入 品目 シェア 品目 金額 金額 シェア 小 麦 調製食料品 18.1 14.0 5.709 1.597 牛肉(骨なし) 4,169 13.2 蒸留酒 572 5.0 綿花 ワイン 2,478 7.8547 4.8 羊毛 7.7豚 肉 2,420 4.0 461ワイン チョコレート等 1,809 5.74273.7 総額 総額 100.0 11,411 100.0 31,571

資料:FAO 統計 注:林・水産物を除く

(2)日本との貿易(2013年)

我が国からの主な輸出品は、自動車・軽油・ゴムタイヤ等であり、主な輸入品は、 石炭・液化天然ガス・鉄鉱石・銅鉱等・牛肉・ウッドチップ等となっている。

※農林水産物貿易概況

(単位:百万USドル)

	輸出	輸入	我が国の
	(日→豪)	(豪→日)	収 支
総額・・・A	16,948	50,955	Δ34,007
農林水産物・・・B	82	5,200	Δ5,118
農林水産物の割合・・・(B/A) %	0.5	10.2	-

資料:財務省貿易統計

(単位::百万 US ドル、%)

				*		
日本→オーストラリア			オーストラリア→日本			
品目	金額	シェア	品目	金額	シェア	
ソース混合物	1,236	15.1	牛 肉	138,706	26.7	
ホタテ貝	1,203	14.7	木材チップ	49,500	9.5	
清涼飲料水	998	12.2	ナチュラルチース゛	38,792	7.5	
アルコール飲料	657	8.0	小 麦	38,433	7.4	
醤 油	446	5.4	大 麦	29,436	5.7	
総額	8,196	100.0	総額	519,958	100.0	

資料:財務省貿易統計



食肉用羊の搬送トレーラー(オーストラリア)

(付録) 十勝毎日新聞掲載記事



月6日、団長・久保旅院了人十勝池田町監事、16十勝島協議権外議業研修視察(昨年11月26日~12 アの農業の「今」を取材した。 人」に同行し、ニュージーランドとオーストラリ (伊藤苑古) 典が行われ、大層に乳製品 的に放牧主体の低コスト船



る。交渉国の現状を確かめようと行われた第37回 理太平洋連携協定(TPP)交渉も大詰めを迎え

ることを教えてくれた。 M (ゼネラルマネジャー) は、放牧地が2000かあ リー・デン・ハーリングロ マルフォナ・ファームのコ から南にいいのボケノ町



77 ニュー ジーランド 寒期の状況を尋ねたが、む 団は一種では広宵が悪い厳 なければ一年中間つ。時間 乳を生産している。 う) に応じて複数種類の牛 のなど消費者の嗜好(し)の4倍を超える。 ノ用として抱みが良いもの~700頭で、十艘平均 ーヒー向けの他、カプチー いため、育ちが良い」とコ しろ「冬の方が降水嚢が多」に長く生産できる。乳質は 牧草は、夏場に干はつがから搾乳できる期間が長

で10年にも適し、3年程度

売、 職戦 ち牛へ

しかし、控乳機数は60

少ないが、規模と経済性は ともされる十勝よりはるか い。その期間は2割強の牛 の負担が少ないため、1回

与えている。 リー氏。牛には牧草のみを高く、コリー氏は「低コス ○長い搾乳期間

放牧酪曲で練題となるのに版化も見られる。同国農 手法を誇った。

上酪裏のモデル」と自国の

抗適量の貼%を占め、「オ は、穀物などの高たんぱく れた際、ジョン・ホーチ次が乳量だ。牧草で育った牛 民連盟ハミルトン支部を訪れる。 いることを指摘した。 で乳腫増に取り組む農家が 遊せている」と、 適度的料 長は「昔は牧草」〇〇%だ った。今は穀物系の飼料も 方で、放牧主体の側質

·酪農

を受ける訪問団の一行 北島最大都市オークランド ク(有機牛乳)。同園内の 多い国の事情を反映し、コ 続く放牧地でスティーブさ 「場は、こからりか先で 岡ファームが生産するの スタイン様、フリージャン 広さ100日。 どこまでも 〈耳・比100~~ ている。 飼育しているのは、ホル 広さ100日。 どこまでも 〈耳・比100~~ ている。

もいわれる十勝の平均を大 きく下回る。 れ最は別級度で、2025と

濃厚飼料、乳量増への動き

ず、「牧草が減ると乳量がが、夏は乾燥で牧草が足り 放牧地は100診ある

ら車で1時間ほどのタウピ マルフォナ・ファームか ▽夏の牧草悩み けた。 乳量の維持・向上を気に掛 ▽世界的な需要

1面から続く

を飼育する。ほとんどを牧 リ町で、スティーブ・マク コーギャンさんは280頭 農民連盟のジョン氏は、農 濃厚飼料の使用について

自身の農場で作ったトウモ ついて研究を始めていると草で育てているが、加えて 家が乳量増や、品質向上に ロコシのサイレージも与え「話す。



ス、乳量でも競争力が増せ

低コストの放牧酪農に加

触れる。

なば、まざに鬼に金棒だ。 富ト 訪問団の一員でJA上士 富ト 訪問団の一員でJA上士 一ランドの乳製品の安さに のの は勝てない。乳量増への取 のの は勝てない。乳量増への取 のの大きな脅威になる」と話し 大きな脅威になる」と話し

る」と、世界的な需要増に 008年から4年間で3割 ば、同国の牛乳生産量は2 005万少に。 増え、日本の2・5倍の2 てジョン氏は「中国はいつ も粉ミルクをほしがってい 農林水産省の統計によれ

平成 27 年 1 月 10 日(土)



外倉産業や加工向けの冷凍 済通携協定(日華EPA)。

大阪倉庫した。 現行38・5 輸出量は7%或るだろう」 た。「2015年の日本への %の牛肉に対する関税を、 日番日かんは昨年4月に ◇酪農にも影響

- Part ない」のが状態だ。

書(CEO)の見方は違っ 州産に比べ価格競争力では 場、中国の需要増がある。 ム・フォード最高経営責任、雄も赤身肉で競合する。豪 2670万頭で前年に比べ 雨が降らないと顕数は増え 魔は頭打ち。かなりの量の つで牧草の生質が悪く、「生 万頭走で味るという。干は 8%減少、今年は2610

いという生産事情や為替相を挙げる。中国は現在外別 東州の14年の創養顕数は一後に0%に下げる予定。「日 のドTAの方が影響は大き の豪州産牛肉の関税を8年 いだろう」と語る。

◇魅力増す中国

への輸出はもっと増やした及した。

本とのEPAよりも中国とように使われるかもしれな グレアムCEOは「日本を高める方摘の必要性に言 い。安心安全な食料を自国 存すると将来、戦略物資の 昭監事は「外国に食料を依 生産基盤維持と食料自給率 易化が進む中でも、国内の で明うのが大事」と自由質 JA十勝地田町の久保庫

ン市にあるピクトリア州艦・身肉だが、酪農家が耐収入・含を与えた。質量には深刻 干ばつで対日輸出頭打ち

避けられない。こう言われ、階的に用滅する。 がどんどん入ってくる。日・5%に、店舗に並ぶ冷蔵パーオーストラリア産牛肉 牛肉は協定発効後18年で19 本の畜産、酪農への影響は 牛肉は15年で23・5%に段 産州産牛肉の値下がりに も細名がしかねない。 かなわず、酪農の生産賞量

十勝農協連視察同行記

る日本・オーストラリア経

き下げとなるが、メルボル 入牛肉は主に脂が少ない赤 した不安を抱える一行に襲 伸び悩むと見込む。 今後、日道15日に発効、牛肉関税が引 でなく、酪農にも及ぶ。輪 アムCEOの言葉は、ころ 格競争力の低下で輸出量は 国ではない ◇伸び悩む頭数

よる影響は国内の畜産だけと変わらない」というケレラ」と推測するものの、

「日本への輸出はそれほ 本への輸出額は増すだろ も付け加えた。「日本はオ た。ケレアムCEOは「目」げを期待する。ただ、こう これまでで、素州ドルは日 本円に対し35%高くなっ でのさらなる関税の引き下 また、為無では10年から 価 ーストラリアの工者の輸出 環本学洋連接協定、TPP いという気持ちはある」

さらに、昨年中国と登制、関税は段階的に下がる。 しも安い豪州産牛肉に一度 今後、日曜日とみで牛肉

基盤が崩壊した後に他国で 市場を奪われ、国内の生産

葡萄薬従事者連盟のグレア にしているホルスタインの な干はつで頭数を増やせな した自由貿易協定(ドト人) くなるかもしれない。 需要が増せば、価格が高騰 日本で牛肉は手が細かな

府との関係は非常に近い

への自信をのぞかせた。 と開税撤廃、引き下げ実現 農家の声は伝わっている。

○政府への信頼

政府との信頼関係が全

平成 27 年 1 月 11 日(日)

ある日本との機能の位置付 然違う」。一行は輸入国で

ドの強い交渉姿勢に思いを

っていなければ合意はしな

○95%が輸出に

れわれは乳製品が品目に入 ば農家は大変だろうが、わ

勢と乳製品輸出の位置付け PPに対する同国の強い姿 の影響に配座しつつも、T

ョン次長は関税撤廃を強く れまで飲用を担ってきた本

い乳製品の開税は維持したることを強調し、「連調を政

一方、TPPを主導する イングに来る」と国のトッ

プと直接議論する機会があ 「ジョン・キー首相もミーテ 交換を行う。ジョン次長は 農家の利益になるよう意見 自治体政府の政策課程で、

ドの交渉姿勢を説明するジ TPPへのニュージーラン

い」と話した。(伊藤亮太 声を上げなくてはいけな 秀穀理事は「農業団体とし 巡らせ、JA 鹿追町の名波 PP交渉。ニュージーラン た。今後大詰めを迎える下 けに大きな隔たりを感じ

てはこれからも断固反対の

ョン次長(右)

変。開税は厚い壁だ」。ジ 道座は飲用向けとなる。こ アメリカも国際競争力の低

いる農業製品との競合は大安全性で国内競争力の高い

関税撤廃による日本職業へメリカなどの補助を受けてて代わられた場合、価格や

を支えている。「日本やア

加工向けが外国際に取っ

う政府に求めた。 を関税撤廃から除外するよ 間院の農林水産委員会が乳 がっており、国会でも衆参 製品を含めた農産物5項目

◇日本45%減少

部。ジョン・ホーチ次長は、

ンド機民連盟ハミルトン支 最も高く、乳製品輸出が国

者が加盟するニュージーラ 出額に占める割合も25%と

2万8000以上の機能は5%が輸出される。全輸ことになる。

もあり、生産される乳製品産は安い輸入品と直接戦う団体を中心に反対の声が上

がえない。連貫は国や地方

しかし、不安の色ほうか

TPP 乳製品に強い意志

PP)で関税が撤廃されれ 多い。環本平洋連携協定(丁

とと国内市場が小さいこと 乳製品も全て加工向け。道

すると試算している。 農業 話す。 乳製品生産量のも名が減少

回域人口450万人は

是生産しているが、一種人

主に保存性の高い加工乳製

日本政府は国内の牛乳・ 次長も「ニュージーランド

の交渉は停滞している」と

「日本は商業への補助がの高さを示した。

十勝農協連視察同行記 2 **東州農業**囚現状

道は大消費地から遠いため、慶を及ぼす恐れがある。 しは立っておらず、ジョン大きな影響を及ぼす。北海 し、地域経済や雇用にも影 れている。今も妥結の見通勝のみならず日本の酪農に の加工工場が操業を停止 たびたび大助合意が見送ら

間税が撤廃されれば、十 他、管内では乳薬メーカー

加国の事情が異なるため、

い考えを持つなど、交渉無

州の酪農へ打撃を与える

平成 27 年 1 月 12 日(月)

44 -





◇水不足の地域

土地は豊富にあるが、乾う。

**ほどに位置する町・シェ ワーを浴びる時間も数分に 後、小規模蟲家にも均等に は最新農職で生産効率を高 (つかさ)理事は「与えらメルボルン市の北180 リア。地域によってはシャ ドさんの農場では大干ばつ 加えて、デイビッドさん なく、JA大樹町の畔木主メルボルン市の北180 リア。地域によってはシャ ドさんの農場では大干ばつ 加えて、デイビッドさん なく、JA大樹町の畔木主 くがってい する人数も、3、4人と少くガイを切ります。

ッド・クックさんの農場。 つが発生し、農畜産物の生 605分のかんがい設備へ 0万円を掛けて購入した木パートンから羽分のデイビ 制限される。たびたび干ば 水を与える国の政策で、1 めている。数年前に300 **産量への影響を少なくでき ば数十人は必要となる従期**

れた気象条件の中、できる

直線に並ぶ。降水量が少な たち006年の大干ばつで、掛けていたが、今は小麦や を備えており、種や農薬を"先まで払れる"となく | 100年に一度とも言われ の飼育や数多くの作物を手 球測位システム (GPLS) 収穫期を迎えた小麦が、数 僕に大きな影響を及ぼす。 の水が遮断された。牛、羊 耕起図醤(は)種種は全地 っている感じ。生産量を高 範囲で取り組める農業をや

めるための技術的な真剣さ を語った。

はあまり見えない」と印象

不耕起栽培 進む高効率化

○「技術は日本」

規模の大きさに由来する

あるが、1つの農業散布量高い」と呼木理事。訪問団爆で病害虫が少ないこともが、「技術力は日本の方が 州機構に大力打ちできない 生産量や効率では到底、

が一直縁に植えられた農場 した量の幼%しかもらえな り、そこに種をまく。詩さ 20%ほどど、十勝の57 中での生き残る道を見いだ 最新の種種機を導入、小麦 く、雨が少ない年は「契約 -ドで土を切って溝をつく 方だ)当たりの生態量は4 終力に、自由貿易化が進む ただ、10パ(1000平 質、安全性を向上させる技は日本の10分の一程度の1 の一行は、手間やコストはは日本の10分の一程度の1 かったい 手間やコストは していた。 (伊藤州太、おわり)

水利権の保有者の力は強 るのが不耕起栽培だ。プレ ただ、IDF(1000平の円で購入しているが、 こうした中で行われてい 20以で済むという。

できるものを作る。 ○GPS播種機

支払わねばならない」とい 持でき、干はつの年でも生 で10000の面積があれ

平成 27 年 1 月 13 日(火)